

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：32688

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 年度～2012 年度

課題番号：22730633

研究課題名（和文） 1900年代から1920年代における保育記録の成立と変容

研究課題名（英文） The Developmental Process of Description of Kindergarten Education

研究代表者

浅井 幸子（ASAI SACHIKO）

和光大学・現代人間学部・准教授

研究者番号：30361596

研究成果の概要（和文）：本研究では保育記録について以下のことを明らかにした。（1）保育者による保育記録の基本的な様式が、1890年代から1900年代に興隆した児童研究における児童観察の試みを通して成立したこと。（2）児童研究によって子どもの活動に発達の教育的な意義が付与されたこと。（3）児童研究の児童観察において保育記録が成立したことによって、記録者である保育者が実践者というよりも観察者の立場で記述する傾向があること。（4）家庭の育児記録や子どもを美的に描く文学的で情緒的な語り口も混在しつつ複雑な保育記録の様式が成立していたこと。

研究成果の概要（英文）：In this research, I clarified four historical characteristics of description of kindergarten education as follows. (1) The main style of description of kindergarten education was formed in child study (child observation) around 1890-1900. (2) Child study presented developmental and educational meaning to child activity. (3) Kindergarten teacher tended to describe child activity as an observer, not as a practitioner, because the description style came from child observation in child study. (4) There were other styles of description, for example the description of child rearing at home, literary and sentimental style describing children as innocence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：

キーワード：保育史、保育者、保育記録、児童研究、東京女子師範学校附属幼稚園、松本幼稚園、フレーベル会

1. 研究開始当初の背景

(1) 保育記録

幼稚園や保育所における保育の営みにおいて、保育者による保育記録は重要な意味を

有している。それは単なる事実の記録ではなく、保育者によって選択され特定の語彙によって意味づけされた出来事の記録である。すなわち保育者が自らの保育について語った

ことは、保育者が自らの仕事をどこに見出しているかということ、子どもたちにどのように関わっているかということ、活動や出来事にどのような意味を見出しているかということを表し構成している。その語り口がどのように成立し変容したかを検討することは、保育研究の省察に寄与すると考えた。

小学校教育においては、1920年代に、教師が「私」という一人称で語り子どもが固有名で登場する物語的な出来事の記録として実践記録の様式が成立し、日本の教師文化を特徴づけ、教育実践を支え規定してきた。しかし保育記録は、それとは異なる系譜において成立しており、独自の検討が必要とされると考えた。

(2) 児童研究

保育の語りの検討を行う予備調査として、もっとも早くに創刊された幼児教育の専門雑誌『婦人と子ども』(後に『幼児教育』『幼児の教育』と改題)を中心に保育者の語りの変遷の検討を行った(浅井幸子「明治末における保育記録の成立過程」『幼児教育史研究』第3号、2008年11月、17-32頁)。この研究では、保育の語りの多様性と時代による変化が明らかになった。1900年に『婦人と子ども』が創刊された当初は、保育者は保育を家庭の育児の欠落の補完として語っており、課業による教育よりも子どもの性質に関心を寄せていた。しかし「児童研究」が導入されるにともない、子どもを観察しその活動を客観的に記述する文体が登場していた。保育者は課業や遊びを行う子どもを記述する言葉を得るが、その記述は意味付けを欠いた羅列的なものとなりがちであった。さらに1910代に保育の改革が企図され、教育方法や教育方針を主な内容とする「保育の実際」の記述が成立する。この研究では、児童研究の導入が重要な意味を持ったことが示唆された。日本における児童研究の解明は、部分的になされていたものの十分には進んでいなかったため、児童研究の歴史的な意義の検討と、児童研究と保育記録の関係の検討をあわせて行う必要があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 主題

本研究では、1900年代から1920年代における保育記録の成立と変容の過程を解明することを目指した。この年代に着目したのは、保育の語りの定型がこの時期に成立したと考えられるからである。1900年前後は教育ジャーナリズムが成立した時期にあたる。『児童研究』(1898年)、『京阪神聯合保育会雑誌』(1898年)、『婦人と子ども』(1901年)など、

保育に関わる雑誌もまたこの時期に創刊されている。それは保育者による保育の語り雑誌上に登場したことを意味する。保育の記録の様式化のはじまりであり、その様式による実践の規定のはじまりである。

1900年代から20年代にかけて、幼稚園の有効性を問う「幼稚園論争」を受けて、また世界的な新教育運動の潮流を受けて、幼児教育における方法の変革が試みられた時期にあたる。その過程において、子どもへのまなざしや教育の意味付けの変化を捉える必要がある。

(2) 研究の特色

本研究の特色は3つある。

①保育記録の歴史的な検討

現在、保育における記録の重要性については自明のものとされ、具体的な記述方法の検討が数多く行われている。しかしその歴史的な検討はほとんど行われていない。保育記録を用いた歴史的な研究はあるが、記録そのものに着目する研究は管見の限り行われていない。保育記録の様式や概念が、幼児教育の理念を基盤として歴史的に成立している事実をふまえ、保育における記録の様式の成立過程を検討する必要がある。

②児童研究への着目

「児童研究」は子どもを科学的かつ総合的に理解しようとする研究の潮流である。日本の児童研究は、同時代における欧米の児童研究、とりわけアメリカのスタンレー・ホールを中心とする児童研究運動の直接的な影響を受けつつ19世紀末に始まった。雑誌『児童研究』は1898年に、高島平三郎、松本孝次郎、塚原政次の三名によって創刊されている。児童研究は保育に、子どもの活動を意味づける重要な基盤を提供したと考えられる。

日本の児童研究運動に関する研究の蓄積は必ずしも十分ではなく、児童研究運動を歴史的に俯瞰する研究は公刊されていない。しかも存在している研究は高島平三郎を扱ったものがほとんどであり、幼児と保育に関心を寄せていた松本孝次郎についてはほとんど研究が行われていない。それゆえ先行研究をふまえつつ、本研究の視点にあわせて史料を収集し再構成する必要がある。すなわち児童研究を子どもやその活動を記述する多様な様式の模索として把握し、保育実践や教育実践との関係を問う必要がある。

③保育改革

本研究では保育の改革を、保育者の語りの水準において記述することを目指す。1900年代から20年代には、積極的に保育の改革が試みられた。先行研究ではその特徴が、子ど

もの尊重、子どもの自由な遊びの重視において特徴づけられてきた。本研究ではこの教育改革を、保育者の語りの変化において検討する。そのことによって、実践の水準において保育の改革を記述することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は歴史研究の手法による。以下のように史料収集を行った

(1) 1890年から1910年の保育記録

①公刊されたもの

当該の時期における幼稚園の保育者の記録を、『婦人と子ども』『京阪神連合保育会雑誌』『児童研究』『教育実験界』といった保育雑誌および実践的な関心の強い教育雑誌にあたり、保育者によって記された保育の記録を可能な限り網羅的に収集した。

②未公刊のもの

未公刊の記録については、東京都文京区の東京女子高等師範学校附属幼稚園、大阪府大阪市の愛珠幼稚園、長野県松本市の松本幼稚園の史料を収集した。保育日誌、保育者による児童研究の記録を中心に、学校日誌や保育時間割等についても収集を行った。収集に際しては、お茶の水女子大学附属図書館、大阪市教育センター、松本市博物館のお世話になった。

(2) 1910年代の保育記録

1910年代の保育記録については、東京女子師範学校附属幼稚園のものを中心に収集を行った。『婦人と子ども』『幼児の教育』に発表された保育記録、書籍に収録された保育記録の収集を行った。あわせて当時の東京女子師範学校附属幼稚園の保育改革をリードした倉橋惣三の文献についても雑誌記事と著作の収集を行った。

(3) 児童研究

①松本孝次郎

児童研究に関連する史料は、保育に深く関わった松本孝次郎の文献を中心に収集を行った。著書として刊行された著作の他に、『児童研究』をはじめ、『教育実験界』『教育学术界』『日本之小学教師』等の教育雑誌に発表された論文の網羅的な収集を試みた。

②フレーベル会関係

児童研究と保育との接点がフレーベル会の幼児発育研究組合であったことから、フレーベル会に関わる史料を収集した。具体的には『教育壇』『教育実験界』『婦人と子ども』に掲載されたフレーベル会関係の記事とフレーベル会の報告である。

③アメリカの児童研究運動

松本の児童研究はアメリカのホールによ

る児童研究運動を継承するとともに、ホールに対する批判からも影響を受けている。必要な範囲でアメリカの児童研究運動についても一次史料の収集を行った。

(4) 先行研究

①保育史研究

当該の時期の保育実践、保育改革の検討を行った先行研究を可能な限り網羅的に収集した。

②児童研究および心理学の歴史

当該の時期の日本の児童研究および心理学に関する研究を可能な限り網羅的に収集した。またアメリカの児童研究にかんする研究についても必要な範囲で収集した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究において、以下のことが明らかになった。

①児童研究と保育

保育記録の一つの基盤が1900年前後に児童研究との関係においてもたらされたとの仮説を検討するために、幼児と保育に関心を寄せ、実際に保育に深く関わった松本孝次郎の児童研究を検討した。

松本は明治期の日本の児童研究を主導した心理学者の一人である。彼は東京帝国大学の元良勇次郎の心理学研究室を1898年に卒業し、高島平三郎、塚原政次とともに雑誌『児童研究』を創刊した。松本はとりわけ保育に関心を寄せた。彼は遊戯、玩具、童話など保育における活動と教材の研究を行った。保育者と教育学者、心理学者からなる研究団体フレーベル会において、児童研究と心理学の講演を行った。フレーベル会では保育者による幼児発達研究の指導も行っている。

松本の児童研究において興味深いのは、子どもの新たな見方と子どもの活動の新たな意味を教育者に提示した点である。

1898年から99年にかけて松本と保育者がフレーベル会で行った子どもの遊戯の研究において、松本は保育者に子どもの活動の発達の意味を提示した。具体的には、松本が子どもの想像作用に関する講義を行い、保育者がその観点から子どもの活動の観察を行っている。保育者によって記された子どもの遊戯の記録において、想像作用は有効な観点として機能していた。

それに対して1903年頃から、松本は教育者による児童研究の新たなかたちとして、自分が扱う子どもの個性調査を提唱する。松本幼稚園では、松本が1905年にフレーベル会で行った個性調査に関する講義に影響を受

けたと考えられる個性調査が行われている。しかしその記述の中で、保育者たちは、松本が提起した心理学的な概念は使用していなかった。

上記のように、松本の保育との接点における児童研究は変化している。その契機となったのは、アメリカにおける児童研究運動に対する批判の受容であった。

この成果は現在論文として投稿中である。

②保育記録の変遷

保育記録の変遷過程を明らかにするために、1900年代から1920年代にかけて雑誌『婦人と子ども』『幼児教育』『幼児の教育』に掲載された保育者による記事を収集し検討を行なった。その結果、課業や子どもの遊びを保育として記述する保育者の語り口が1910年頃に成立していること、東京女子高等師範学校附属幼稚園では1920年代の実験的な模索の時期に保育を出来事として記述する実践記録の様式が成立していること、課業や遊びに保育が見出される一方で子どもの問題への対応が保育者にとって重要な仕事であり続けていたことが明らかになった。

この成果は、以前の研究成果とあわせて再検討を行い、「保育記録の成立と変容—『婦人と子ども』を中心に」（太田素子・浅井幸子編『保育と家庭教育の誕生』藤原書店、2012年2月）として発表した。

（2）国内外における位置づけとインパクト

①保育記録の様式

保育記録はこれまで、様式よりも内容に着目して検討が行われてきた。本研究によって、記録の様式を検討する観点が得られたと考える。

②児童研究、心理学と保育

児童研究や心理学が保育にどのような影響を与えたかということについて、近年、検討が試みられてきた。本研究はその企図の一部として位置づいている。

（2）今後の展望

①心理学と保育

本研究の重要な成果は、松本孝次郎の児童研究の検討を通して、児童研究と保育との関係を保育記録の水準において具体的に解明した点にある。児童研究は1910年頃には衰退するが、児童心理学、発達心理学へと展開を遂げた。

保育と心理学の関係は、1920年代以降、ますます密接なものとなっている。第二次世界大戦前から戦後にかけて保育をリードした倉橋惣三と城戸幡太郎は、ともに心理学者としての顔を持っていた。彼らの心理学と保育との関係を、保育記録に着目して明らかにす

ることが今後の課題である。

②保育記録の多様な様式

とりわけ1910年代半ば以降、多様な保育改革が試みられ、多様な保育記録の様式が生み出されている。それはIQ測定等の心理学との関わりにおいて検討されるべきもの、新教育との関わりにおいて検討されるべきもの、大正期における童心主義との関わりにおいて検討されるべきものなど、多様な系譜を含んでいる。

可能な限り多くの保育記録を収集し、その系譜を検討することが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計1件）

1 太田素子・浅井幸子編著『保育と家庭教育の誕生』藤原書店、2012年、93-143頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅井 幸子 (ASAI SACHIKO)

和光大学・現代人間学部・准教授

研究者番号：30361596